九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『千のプラトー』における内在平面：ドゥルーズ『スピノザ：実践哲学』との関係から

大崎, 晴美
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/2328430

出版情報：哲學年報. 58, pp.103-135, 1999-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『千のプラトー』における内在平面

―ドゥルーズ『スピノザ―実践哲学』との関係から―

大崎晴美

はじめに

『千のプラトー』は、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの一九八〇年の共著であり、同じく二人の共著である一九七二年の『アンチ・エディプス』とともに、『資本主義と分裂症』という連作[1]を形成する。『千のプラトー』では、前作の『アンチ・エディプス』にはない多くの概念が導入されるが、その内で最も重要なものの一つに、「内在平面」(plan d'immanence) があり、それはまた、「存立平面」(plan de consistance) とも呼ばれる。この内在平面は、『千のプラトー』という著作の成立様式を規定する中心概念である「リゾーム」(rhizome) と密接な関係にある。実際、ドゥルーズは、ジャン・クレ・マルタン宛の手紙で、多なるものとしての多なるものの肯定というこの著作の企図にとって最良のものとして、リゾームの概念に言及している。

「それ自身としての諸々の多様体 (multiplicités) に捧げられているのは、『千のプラトー』である。」(V, p. 8)

「《リゾーム》は、諸々の多様体を指し示すために最良の語である。」(V, p. 8)

しかし、実はこのリゾームが確立されるために必要不可欠なのが、内在平面、あるいは、存立平面なのである。次の箇所は、『千のプラトー』で、存立平面という用語の説明に当てられた部分での言明である。

「存立性は、（中略）リゾーム型の諸々の多様体の強化を確実なものにする。」（MP, p. 632）

また、内在平面の概念は、『千のプラトー』の内に見出されるにとどまらず、晩年へと至るその後のドゥルーズ＝ガタリあるいはドゥルーズの著作の中でより重要性を増していく。事実、内在平面は、一九九一年のドゥルーズ＝ガタリの共著『哲学とは何か』では、この本の主題である哲学の三つの要素の一つとしての地位を占める[2]（QP, p. 74）のみならず、ドゥルーズの最後の論文である一九九五年の「内在性：ある一つの生」では、生そのものと同一視されもする[3]（PG, p. 4）。従って、この概念を理解することは、『千のプラトー』という著作を理解する端緒となると同時に、この著作をドゥルーズ＝ガタリあるいはドゥルーズのその後の著作との連関で位置付けることへの可能性を開く。そして、そのことは、ドゥルーズ＝ガタリの哲学観、ひいては、哲学と不可分に結び付いたものである限りでのドゥルーズにとっての生を明らかにするという射程の広がりを持つ。

さて、これらの著作における内在平面の概念を貫いているのは、スピノザとの関わりである。『千のプラトー』における内在平面の着想は、彼等によって独自の仕方で理解される限りでの、スピノザの哲学に由来する。それに加えて、『哲学とは何か』でも、「内在性—ある一つの生」でも、内在平面はスピノザと結び付けて言及される[4]。

「スピノザ、無限の哲学者—への生成変化。彼は、《最良の》、すなわち、最も純粋な内在平面を示し、作成し、思考した。」（QP, p. 59）

「哲学的な作業の最も深い所にスピノザ主義を再導入する真の内在平面」（PG, p. 4）

更に、内在平面の着想がスピノザに由来することは、一九七〇年初版、一九八一年再版のドゥルーズのスピノザ論『スピノザ—実践哲学』[5]によって示される。この著作の再版での加筆部分では、『千のプラトー』とほぼ同じ仕方で、スピノザに即して内在平面について言及される。のみならず、内在平面を定義する枠組みは、初版からある部分の内に既に最初から見出される。そこから、ドゥルーズのこのスピノザ論が内在平面の着想を方向付けていることが明らかに

なる。また、そこでのスピノザ解釈を手がかりにして、『千のプラトー』での内在平面の概念と、この著作の成立様式を理解する可能性が開かれる。

本論は、ドゥルーズのスピノザ解釈との関係で、『千のプラトー』での内在平面の概念を解明するとともに、そこから、この著作の成立様式の持つ意味を明らかにすることを試みる。まず、この著作において、内在平面の概念がどのようなものとして提示されているかを考察し、そのことがスピノザとの結び付きでなされていることを示す（1）。次に、この著作において彼等がスピノザの内に見出す枠組みが、ドゥルーズの『スピノザ――実践哲学』の内に、初版部分と再版部分の区別なく、一貫して存続していることを明らかにする（2）。更に、この枠組みが、スピノザの『エチカ』のどの部分に基づいており、そこからどのようにして着想されたのかを検討する（3）。また、この検討から明らかになる、ドゥルーズのスピノザ解釈の前提に着目して、再び内在平面の概念をとらえ直す（4）。最後に、内在平面の概念のこのとらえ直しを手がかりにして、『千のプラトー』という著作の成立様式の持つ意味を考える（5）。

1．内在平面とスピノザ的枠組み

『千のプラトー』において、内在平面は、「超越平面」(plan de transcendence) の対概念として提示される。両者はともに、所与としての多なるものを与えるものが属する次元、もしくは、この次元についての考え方として着想され、両者を区別するのは、この次元が所与そのものの内にあるかどうか、また、そのことによって、所与としての多なるものが多なるものとして肯定されるかどうかということである。

一方で、超越平面とは、所与を与えるものの属する次元が所与の内にはない場合に、この次元を指す。その場合には、所与としての多なるものは、所与の外にあるこの次元によって統一性を付与されることで、多なるものとして肯定されることが不可能になる。

「平面は、人が見るものを見えさせ、理解するものを理解させる…等といったように、何らかの状態の下で、何らかの瞬間において、絶えず所与が与えられるようにする、隠された原理であり得る。しかし、平面はそれ自身では与えられない。それは本性によって隠されている。平面は、平面が与えるものから出発して推論し、導出し、結論され得るにすぎない（中略）。実際、そのような平面は、展開の平面であると同様に、組織化の平面でもある。（中略）いずれにせよ、このように着想された、あるいは、作り上げられた平面は、諸々の形態の展開と諸々の主体の組織化に関わる。（中略）とすれば、平面がそれ自身では与えられないのもやむを得ない。実際、平面は、それが与えるものに対して補足的な次元においてしか存在しない（中略）。このことの故に、それは神学的な平面、意図、心的な原理である。それは超越性の平面である。（中略）諸々の形態とそれらの発展、諸々の主体とそれらの形成は、超越的な統一性あるいは隠された原理として働く平面を指し示す。」（MP, p. 325）

超越平面は、所与を与えはするが、それ自身は所与としては与えられない。この意味で、それは、所与に対して付け加えられる補足的な次元として、所与を超越している。ここから、この次元は超越平面と呼ばれる。それは、所与としての多なるものから推論によって導出されるしかないような一者として想定される。更に、このような一者としての超越平面が、多なるものに対して超越的な統一性を付与することで、多なるものが統合され、各々としての固定的な同一性を持つ主体や対象として成立する。つまり、主体や対象の成立は、超越平面という一者の想定によって可能となるのである。

他方で、内在平面とは、所与を与えるものの属する次元が所与そのものの内にある場合に、この次元を指す。その場合には、所与としての多なるものは、その外から統一性を付与されることなく、多なるものとして肯定されることが可能になる。

「更に、全く別の平面、あるいは、平面についての全く別の着想が存する。そこには、諸々の形態もそれらの発展

も、諸々の主体もそれらの形成も、もはや全く存しない。（中略）ただ、形態を持たない、少なくとも、相対的には形態を持たない諸要素、つまり、あらゆる種類の分子や微粒子の間の、運動と静止、速さと遅さの間の関係のみが存する。ただ、諸々の集団的なアレンジメントを構成する、諸々の此性、情動、主体なき個体化のみが存する。（中略）諸々の経度や緯度、諸々の速さや此性しか知らないこの平面を、我々は、（組織化と展開の平面との対立において）存立あるいは構成の平面と呼ぶ。それは必然的に、内在性あるいは一義性の平面である。」（MP, p. 326）

内在平面は、所与を与えるのみならず、それ自身もまた所与として与えられる。このように、所与に対して補足的な次元を付け加えることなく、所与そのものの内にあり、そこに一貫して存することの故に、それは内在もしくは存立平面と呼ばれる。そこでは、超越的な一者の不在によって、あらゆるものは、固定的な同一性を割り振られた主体や対象としてではなく、各々が此性としてしか規定されない絶対的に特異な個体として出現する。また、各々の個体がそのようなものとして出現するのは、それらを構成する分子や微粒子等の諸要素の運動と静止の関係と、それに対応する情動が、その都度絶対的に特異なものであることの故にである。つまり、個体という所与の内にある、所与を与えるものとは、個体を構成する諸要素の運動と静止の関係と、それに対応する情動のことであり、内在平面とは、あらゆる個体の内にあるこの関係と情動の両者が累積された総体なのである。[6]

さて、内在平面についてのこうした着想は、『千のプラトー』の別の箇所で、スピノザとの結び付きにおいて言及されている。この著作には、「あるスピノザ主義者の思い出」という表題の付いた二つの節があり、まず、その一つ目の節では、スピノザの世界観の一側面が次のようなものとして語られている。

「人は、諸々の本質的あるいは実体的形相を非常に様々な仕方で批判してきた。しかし、スピノザはそれを徹底的に行った。すなわち、もはや形相も機能も持たないような、従って、その意味では、完全に実在的であるにもかかわらず、抽象的であるような諸要素へと到達すること。それらの諸要素はただ、運動と静止、遅さと速さのみによって

区別される。（中略）これらは、それらがその内に入るところの、速さの度合い、あるいは、運動と静止の関係に従って、あれこれの個体に帰属する。また、この個体それ自身が、より複雑な他の関係の下では、他の個体の部分であり得るのであり、以下こうしたことが無限に続く。（中略）各々の個体は、無限の多様体であり、また、自然全体は、諸々の多様体からなる、完全に個体化された多様体である。」（MP, p. 310〜311）

この箇所では、諸要素が運動と静止の一定の関係の下に入ることによって、各々の個体が構成されることが述べられている。更に、あらゆる個体の総体である自然全体もまた、同じ仕方で各々の個体を部分として構成される。この箇所では、個体と自然全体の両者は、「多様体」（multiplicité）という同じ語によって形容される。多様体とは、多が実詞として扱われたもの（MP, p. 14）、つまり、多なるものが多であることそれ自体が肯定されたもののことである。それは、具体的には、多くの諸要素によって構成された集合体を指し、これらの諸要素の関係の変化に応じてそれ自体もまた多くの仕方で変化する。この意味では、自然全体もまた一つの多様体であり、その資格において、各々の個体を要素とする一つの個体と見なされる。そして、多くの個体の集合体としての自然もまた、それらの個体の関係の変化に応じてそれ自体もまた多くの仕方で変化する。

この箇所で語られている、諸要素の運動と静止の関係の下での個体の構成は、前に内在平面上で生じる事態として語られていたものと同じであり、更に、この箇所では、この事態を規定する枠組みがスピノザに由来することが述べられている。実際、この箇所の直後では、あらゆる個体の総体であると同時に、それ自体もまた一つの個体であるような自然が、自然の存立平面と呼ばれ、次のような仕方で言及されている。

「自然の存立平面は、抽象的な、にもかかわらず、実在的かつ個体的な巨大な機械のようなものである。その諸々の部品は、様々なアレンジメントや個体であり、それらのアレンジメントや個体の各々が、多かれ少なかれ構成されたものである無限に多くの関係の下に、無限に多くの微粒子を集める。」（MP, p. 311）

また、その少し後では、この自然の存立平面が、内在平面と言い換えられてもいる。つまり、ここでは、個体も自然全体も同じく多くの要素からなる多様体であるという、スピノザの内に見出された世界観の一側面との結び付きで、内在平面が語られているのである。

だが、先では、諸要素の運動と静止の関係と、この関係に対応する情動という二つの様相によって、内在平面が規定されると言われていた。それらの内で、前者についてはスピノザとの結び付きでの言及はあるとして、後者についてはどうなのか。後者についての言及がなされるのは、「あるスピノザ主義者の思い出」という表題の二つ目の節である。次の箇所は、この節の冒頭からの引用である。

「スピノザにおいては、もう一つの様相が存する。無限に多くの諸部分を集める、運動と静止、速さと遅さの各々の関係に、力能（puissance）のある度合いが対応する。個体を構成し、分解し、あるいは、変様させる諸関係に、諸々の強度が対応する。（中略）力能のあれこれの度合いに従って、あるいはむしろ、この力能の諸限界に従って、ある身体に可能な諸々の情動を、人はこの身体の緯度と呼ぶだろう。経度が、ある関係の下での外延的な諸部分からなるのと同じく、緯度は、ある能力の下での強度的な諸部分からなる。」（MP, pp. 313〜314）

この箇所では、個体を構成する諸部分の運動と静止の関係に、各々の個体が自分の力能として感じる情動が対応することが、スピノザの世界観のもう一つの側面として述べられている。前者が経度、後者が緯度と呼ばれる。また、この箇所では、経度としての運動と静止の関係の下にある諸部分が外延的、緯度としての情動に一致する諸部分が強度的と呼ばれてもいる。一方で、これまで見てきたような、個体を構成する諸要素は、それら自身の本性を保ったままでより大きな別の個体を構成することの故に、外延量に属する外延的な諸部分と見なされる。何故なら、外延量とは、距離、面積、体積等のように、空間における拡がりを持ち、量的に加算可能な、従って、性質を変えることなく分割可能な量を指すからである。それに対して、強度量とは、温度、速度、明るさ等のように、感覚される強さの度合い

のみを持ち、量的には加算不可能な、従って、性質を変えることなしには分割不可能な量を指す。そこから、各々の個体の各々の状態に応じて様々な性質を持つ力能あるいは情動が、強度量に属する強度的な諸部分と見なされる訳である。

更に、この節では、各々の個体がこうした緯度と経度によって定義されるのみならず、あらゆる個体からなる自然全体もまたこれらの二つの様相によって定義される。そして、そのことが再びスピノザとの結び付きにおいて言及される。

「身体からこれらの二つの次元を取り出し、総体としての自然の平面を純粋な経度と緯度によって定義した功績は、スピノザに帰せられる。」(MP, p. 318)

この箇所で、「自然の平面」と言われているのは、明らかに内在平面のことである。そのことは、内在平面が、自然全体に含まれるあらゆる個体を構成する、諸要素の関係とそれに対応する情動、つまり、緯度と経度の総体として前に理解されたこととも符号する。

そこから、個体を構成する諸要素の運動と静止の関係、この関係に対応する情動としての個体の力能、つまり、経度と緯度という内在平面の二つの様相、それに加えて、経度としての関係から不可分な諸要素という、内在平面を成立させる三つの契機は、スピノザと結び付けられる枠組みに基づいて着想されていることが分かる。この枠組みは、実はドゥルーズの『スピノザ―実践哲学』に由来する。次に、このスピノザ論を考察しよう。

2. 『スピノザ―実践哲学』の一貫性

『スピノザ―実践哲学』の初版は一九七〇年、再版は一九八一年である。つまり、その再版は『千のプラトー』の出版の一年後なのである。従って、再版での加筆部分は、『千のプラトー』でのスピノザ理解を直接的に反映している。

しかし、実はそのスピノザ理解の基本的な骨格は、初版部分で既に提示されている。ちなみに、再版の第一章、第二章、また、『エチカ』の主要概念の解説である第四章のほとんどの項目が、初版からの継続部分であり、第三章、第五章、第六章と、第四章の中の四項目が、再版での加筆部分である。[7]

まず、次の箇所は、再版で加筆された第六章からの引用である。

「我々は、諸々の微粒子、言い換えれば、形を持たない諸要素の間の、速さと遅さ、運動と静止の諸関係の総体を、ある任意の身体の経度と呼ぶ。それらの微粒子は、こうした観点からこの身体を構成する。我々は、各々の瞬間に身体を充たす諸々の情動の総体、言い換えれば、無名の力（存在する力、変様される能力）の諸々の強度的な状態を、緯度と呼ぶ。このようにして、我々は身体についての地図を作成する。諸々の経度と緯度の総体は、自然を、内在あるいは存立の平面を形作る。それは、常に可変的であり、諸々の個体や集団によって、絶えず再編され、構成され、再構成されている。」(SP, p. 171)

この箇所では、経度と緯度、つまり、外延的な諸要素の運動と静止の関係と、それに対応する強度的な状態による、個体と自然の両者の構成が語られており、その場合の自然が、内在平面あるいは存立平面という言葉で言い表されている。こうした枠組みは、『千のプラトー』の内に存したものと同じである。そこから、この箇所が『千のプラトー』でのスピノザ理解を直接的に反映していることは明らかである。

だが、再版に見られるこうした枠組みは、初版での主題の延長線上に位置付けられる。そのことは、第四章の初版部分にある次の箇所を見れば明白である。

「従って、個体は常に、特徴的な関係の下で様態の特異な本質に属する限りでの、無限に多くの外延的な諸部分によって構成されている。」(SP, p. 110)

この箇所は、個体が外延的な諸部分によって構成されていることを語っている。

「しかし、あらゆる出会いにおいて、永遠の真理としての諸関係が常に存する。そのため、この秩序に従えば、人は自然全体を、あらゆる関係を構成するような、また、異なる度合いを持つ外延的な諸部分のあらゆる無限集合を所有するような、一つの個体として理解するだろう。」(SP, p. 111)

この箇所は、個体と同様に外延的な諸部分によって構成されることで、自然全体もまた一つの個体として理解されることを述べている。二つの箇所の内には、個体と自然全体をともに諸要素の集合体として考える着想が表れているが、この同じ着想は、再版での加筆部分と『千のプラトー』を貫いて存続していたものに他ならない。

更に、個体と自然全体を構成する外延的な諸部分、それらの運動と静止の関係、また、この関係に対応する強度的な諸部分という三つのものは、『スピノザ―実践哲学』の第四章の初版部分で、様態の三つの契機として挙げられている。

「1°様態は、力能の度合い、あるいは、強度的な部分、永遠の部分であるような個別的な本質を持ち、各々の本質は絶対的に単純であり、他のあらゆる本質と一致する。2°この本質は、それ自身が存在に関わる永遠の真理であるような特徴的な関係の内で自らを表現する(例えば、延長における運動と静止の一定の関係)。3°様態は、その関係が無限に多くの外延的な諸部分を現実的に包摂する時、存在へと移行する。」(SP, p. 109)

この箇所は、緯度と経度という言葉は使っていないものの、個体としての様態を形成する三つの契機として、第一に、様態の存在をなす外延的な諸部分、第二に、それらの運動と静止の関係、第三に、この関係に対応し、様態の本質をなす強度的な部分を挙げている。これらの契機は、若干の用語の違いを除けば、再版での加筆部分と『千のプラトー』の両者において、内在平面を成立させる三つの契機として言及されていたものと同じである。

以上のことから、『千のプラトー』の内に存するスピノザ的枠組みは、『スピノザ―実践哲学』の初版に由来し、『千のプラトー』の執筆後に、再版で再び新たな用語によって定式化し直されたものと考えることができる。従って、こ

の点に関しては、『スピノザ―実践哲学』を、初版部分と再版部分で一貫した一つの著作として扱うことが可能となる。また、それと同時に、『スピノザ―実践哲学』でのドゥルーズのスピノザ解釈が『千のプラトー』の内在平面の概念を方向付けていることを主張することが可能となる。[8]

ただ、これまで見てきたスピノザ的な枠組み、つまり、外延的な諸部分と強度的な諸部分の並存、これらの部分による個体と自然全体の構成という主題は、スピノザの哲学に即して必ずしも自明である訳ではない。そのため、今度は、スピノザの『エチカ』に立ち戻り、そこからどのようにしてこれらの主題が引き出されるのかを考察する必要がある。

3. 『エチカ』における背景の考察

『スピノザ―実践哲学』から『千のプラトー』へと受け継がれた、前述のスピノザ的な枠組みは、『エチカ』のどのような部分に基づいて語られるのか。そのことを、『スピノザ―実践哲学』による参照箇所の指示に従って見ていこう。

まず、外延的な諸部分による個体と自然の構成ということについては、『エチカ』第二部定理一三以下の補助定理群が参照される。この部分は、外延的な諸部分による個体の構成を語る前章での引用箇所（SP, p. 110）の末尾で指示されている。実際、それらの補助定理群においては、物体（corps＝身体）が、運動と静止の一定の関係の下にある諸部分から構成されることが繰り返し言及されている。その場合に前提とされているのは、補助定理三定義での次のような言明である。

「同じあるいは異なる大きさの一定数の物体が、他の物体によって、相互に接合し合うように強制される場合、あるいは、それらの一定数の物体が同一のあるいは異なる速さによって運動するのであれば、一定の関係に従ってそれ

らの運動を相互に伝達し合うように強制される場合、我々は次のように言う。これらの物体がそれらの間で統合され、それらが全体で唯一の同じ身体を構成する、別の言い方をすれば、物体のこの統合によって他の諸々の個体から区別される、一つの個体を構成する。」(E, p. 371)

それに加えて、補助定理七の注解では、最も単純な諸部分によって構成される諸個体が、より大きな別の個体を構成することが述べられている。その場合に、より小さな個体を諸部分として構成される複合的な個体は、各々の部分の運動と他の部分へのその伝達が以前と同じ状態に保持されるならば、その本性を保持したままで多くの仕方で変化することができる。また、同じことが以下無限に続いた結果、自然全体が一つの個体となるに至る。

「もし今我々が、異なる本性の多くの個体から構成された他の個体を理解するならば、我々は、その個体が全くその本性を保持したままで他の多くの仕方で変様され得るということを見出す。実際、各々の部分は多くの物体から構成されているため、この部分は（中略）、その本性における変化を伴うことなく、ある時はより遅く、またある時はより速く運動することができるだろうし、従って、より速くあるいはより遅く、その諸々の運動を他の諸部分へと伝達することができるだろう。」(E, p. 373)

「もし我々がこのように無限に続けるならば、その全体性における自然が唯一の個体であり、その諸部分、すなわち、あらゆる物体が、全体的な個体の変化を伴うことなく、無限に多くの仕方で変化するということを、我々は容易に理解する。」(E, p. 373)

『千のプラトー』と『スピノザ―実践哲学』に共通する、諸部分による個体と自然の構成という着想がここに由来することは明らかである。

次に、外延的な諸部分と強度的な諸部分の並存ということについてだが、実は外延的、強度的という区別そのものは、スピノザの用語ではない。これらの二種類の諸部分の区別に関して、『スピノザ―実践哲学』は、第五部定理三八、

三九、四〇を指示している（SP, p. 101）。第五部定理三八は、精神が、第二種あるいは第三種の認識、つまり、十全な認識において事物を認識するに従って、悪い感情から働きかけを受けなくなり、死を恐れなくなることを述べる。ここで言われる第二種の認識とは、あらゆるもしくは複数の事物に共通であり、全体の内にあるのと同じように部分の内にあるものについての認識を指し（第二部定理三八、三九）、そのことの故に、共通概念とも呼ばれる。それに対して、第三種の認識とは、あらゆる事物の本質そのものについての認識を指す（第二部定理四〇注解二）。第五部定理三八注解では、精神の内で、第三種の認識を持つことで、身体が滅びても存続するようになる部分と、身体とともに滅びる部分が区別される。定理三九は、多くのことをなし得る身体を持つ者の精神の大部分は永遠であることを述べる。その注解では、こうした精神が、少しのことしかなし得ない者の精神と対比される。ここで言われるなし得ることの内には、自己と神と事物を意識することも含まれる。定理四〇は、より多くの完全性を持つ精神は、それだけより多く働きかけを行い、逆もまた真であることを述べる。その系では、精神の内で、存続する部分がより完全であり、働きかけを行うことが、身体とともに滅びる部分がより不完全であり、働きかけを受けることと対比される。従って、これらの定理において提示される区別とは、精神の内で、第三種の認識を得ることによって永遠に存続するようになるより完全な部分と、それらの認識を得ることなく身体とともに滅びるより不完全な部分の間の区別なのである。そして、定理四〇注解では、精神の前者の部分が、他の精神の同様の部分とともに、神の無限知性を構成することが述べられる。

「我々の精神は、理解する限りにおいて、思惟する永遠の様態である。この様態は、他の思惟する永遠の様態によって規定されており、また、この他の様態は、今度は更に他の様態によって規定されており、このようにして無限に続く。こうして、すべての思惟する永遠の様態は全体で、神の永遠かつ無限の知性を構成する。」（E, p. 594）

このような部分が、ドゥルーズによって強度的なものと見なされる。この定理四〇注解は、人間の精神の部分が神

の無限知性の一部をなすことを述べるが、たとえその内に永遠の部分を含むとしても、人間の知性は神の無限知性とは本性上異なる。これらのことを一貫して説明するためには、知性は、性質を変えることなしには分割不可能な、つまり、分割されることによって性質を変える強度量として理解される必要があったのである。こうした強度的な部分として理解されることにおいて、様態である人間の知性が、神の知性とは異なりつつも、その一部としてそれを構成することが矛盾なく両立可能となる。

それに対して、外延的な諸部分について言及するものと考えられるのは、前述の第二部定理一三補助定理七注解である。そこでは、最も単純な諸部分によって構成される諸個体が、より大きな別の個体を構成し、同じことが以下無限に続いた結果、自然全体が一つの個体となるに至ることが述べられていた。この場合に、個体を構成する最も単純な諸部分が、外延的なものと見なされる。実際、これらの諸部分によって構成される個体がその本性を変えることはあっても、これらの諸部分そのものは、それら自体の本性を変えることなく、集合によってあらゆる個体を構成する。そこから、これらの諸部分は、性質を変えることなく分割可能な外延量として理解される。また、こうした外延的な諸部分の各々に対応する精神の部分が、身体とともに滅びる不完全な部分に相当する。

では、『エチカ』において、これらの二種類の諸部分の間にはどのような関係があるのか。それらについて語られる文脈から考えてみよう。まず、外延的な諸部分について語る補助定理群の大前提にある、第二部定理一三そのものは、人間の精神の観念の対象が、身体、もしくは、現実に存在する延長の様態であることを述べる。

「人間の精神を構成する観念の対象は身体である。別の言い方をすれば、現実に存在する延長の何らかの様態であり、それ以外の何物でもない。」(E, p. 367)

次に、強度的な諸部分について語る第五部定理三八で前提とされる、第五部定理二九は、精神があらゆる事物を永遠の相の下で認識するのは、身体の本質を永遠の相の下で認識することによってであることを述べる。

「精神は、それが永遠の相の下で認識するあらゆるものを、身体の現実的な存在を把握することの故に認識するのではなく、身体の本質を永遠の相の下で認識することの故に認識する。」(E, p. 584)

ここで言われる、永遠の相の下で認識されるものとは、第三種の認識の対象である。そこから、外延的な諸部分と強度的な諸部分の間の関係が理解される。すなわち、これらの二種類の諸部分は、様態の内で最初から並存している訳ではなく、外延的な諸部分が、精神によって、永遠の相の下で、つまり、第三種の認識において把握されることによって初めて、強度的な諸部分が獲得されるのである。

ところで、この第三種の認識に先行する第二種の認識は、ドゥルーズによってどのようなものとして理解されているのか。

「存在する各々の身体は、運動と静止の一定の関係によって特徴付けられる。二つの身体に対応する諸関係が相互に構成される時、二つの身体は、より高次の力能を持つ一つの集合、その諸部分の内に現前する一つの全体を形成する。(中略)共通概念とは、二つあるいは複数の身体の構成の、また、この構成の統一の表象である。」(SP, pp. 126〜127)

ここから分かるように、ドゥルーズにとっての第二種の認識、つまり、共通概念とは、各々が運動と静止の一定の関係の下にある複数の身体が一つの全体を形成する時、これらの関係が相互に構成されて出現する、運動と静止の新たな関係についての観念なのである。従って、各々の身体における運動と静止の一定の関係は、それらの集合体であるより大きな身体における運動と静止の関係を対象とする、共通概念としての第二種の認識が成立するための起点となる。あるいは、どんな身体もより小さな身体の集合体であるという観点からすれば、各々の身体におけるこの関係はそれ自体で既に第二種の認識なのである。

とすれば、ドゥルーズの見解に従えば、精神は、身体における外延的な諸部分の運動と静止の関係の認識を獲得し

た後、身体の本質である強度的な諸部分の認識を獲得するという道筋を辿り、この進行が、第二種の認識から第三種の認識への進行[9]に一致することになる。このことの内には、先に様態を形成する三つの契機として言及されていた、外延的な諸部分と、それらの運動と静止の関係と、強度的な諸部分の関係という三つのものの間の関係が集約されている。つまり、外延的な諸部分は、それらの運動と静止の一定の関係の下で把握されることで、強度的な諸部分を伴うものとしてとらえ直されることになるのである。従って、これらの三つの契機は、こうした認識の進行を経過した後にのみ並置され得る。あるいは、逆に言えば、これらの三つの契機が並置されることは、こうした認識の進行を前提として初めて可能となるのである。

だが、そのことを語る前述の引用箇所では、これらの三つのものは全く逆の順序で引き合いに出されていた。同じ箇所を次にもう一度引用してみよう。

「1°様態は、力能の度合い、あるいは、強度的な部分、永遠の部分であるような個別的な本質を持ち、各々の本質は絶対的に単純であり、他のあらゆる本質と一致する。2°この本質は、それ自身が存在に関わる永遠の真理であるような特徴的な関係の内で自らを表現する（例えば、延長における運動と静止の一定の関係）。3°様態は、その関係が無限に多くの外延的な諸部分を現実的に包摂する時に、存在へと移行する。」（SP, p. 109）

この箇所では、様態の強度的な本質から外延的な存在へと向かう、存在の根拠付けの序列が語られている。しかし、スピノザの『エチカ』を参照することから分かるのは、実はここには、外延的な存在から強度的な本質へと向かう、認識の進行の道筋が前提とされているということである。実はこの認識の進行は、ドゥルーズの『スピノザ―実践哲学』において、独自の仕方で解釈されている。以下、この独自の解釈を検討しよう。

4. 認識の進行と神の観念

では、『スピノザ―実践哲学』において、外延的な存在から強度的な本質へと向かう認識の進行は、どのような仕方で理解されているのか。前に見たように、様態の存在を構成する外延的な諸部分が、運動と静止の一定の関係の下で、ひいては、第二種の認識において把握されることを経て、様態の本質を構成する強度的な諸部分、つまり、第三種の認識が獲得される。この認識の進行を、『スピノザ―実践哲学』に即して考察してみよう。

まず、共通概念としての第二種の認識は、複数の事物の構成の統一を表す、運動と静止の一定の関係の認識から始まって、あらゆる事物に共通なものの認識、つまり、あらゆる事物がその内にあり、かつ、それによって産出されるような神の観念へと至る。この観念の獲得によって、神の内にあり、かつ、神によって産出されるあらゆる事物は、今度はそのような神の力能あるいは本質を分有するものとしてとらえ直される。それが第三種の認識である。そして、この第三種の認識において、あらゆる事物は、それらに共通する構成の統一の下にではなく、各々の特異な本質相互の連関の下に把握されることになる。

「諸々の共通概念は必然的に、我々に神の観念を与える。神の観念は、最も一般性の大きい共通概念としてさえ妥当する。[10] というのは、それは更に、存在するあらゆる様態に共通に存するもの、つまり、それらが神の内にあり、かつ、神によって産出されたものであるということを表現するからである。（中略）従って、諸々の共通概念が我々を必然的に神の観念へと導く時、それらの共通概念は我々を、すべてがひっくり返るような地点へと、また、第三種の認識が、神の観念の新たな意味と、この第三種の認識から構成された諸々の新たな感情の意味とともに、神の本質と諸々の実在的な存在の特異な諸本質の相関を、我々に発見させるようになる地点へと至らせる。」（SP, pp. 130～131）

第二種の認識から第三種の認識へのこのような進行に関するドゥルーズの解釈の独自性は、神の観念を、この進行

の出発点でも到達点でもなく、その途中の単なる通過点として見なすことの内にある。つまり、彼は、神の観念の意義を、第二種の認識から第三種の認識への移行、特に、後者の内でも、神の本質ではなく、あらゆる事物の本質についての認識への移行を可能にすることの内に認めているのである。[11]

「第二種の認識から第三種の認識にかけて、本性の差異が存する。（中略）我々を一方から他方へと移行させるのは、神の観念である。（中略）神の観念は、神の本質を含み、この新たな様相の下で我々を第三種の認識へと移行させるように強いる。」（SP, p. 81）

「神の観念は、諸々の共通概念と、共通概念の使用と深く結び付いているが、それ自体は共通概念ではない。すなわち、それは、あらゆる一般性を払拭し、我々を神の本質から実在的で特異な存在としての諸事物の本質へと移行させる能力を持つのである。」（SP, pp. 116〜117）

こうした解釈は、本質あるいは力能についてのドゥルーズの理解に基づいて語られる。実際、神の無限の力能は、それが無限に多くのものを無限に多くの仕方で産出することなしには、それとして行使されたことにはならない。そのことについて述べるのが、『エチカ』第四部定理四証明の次の箇所である。

「人間の力能は、その現実的な本質によって説明される限りにおいて、神あるいは自然の無限の力能の、すなわち、その本質の一部である。」（E, p. 494）

とすれば、各々の様態の本質が絶対的に特異なものとして出現することそれ自体が、それらを産出する神の力能あるいは本質の発現を指し示すことになる。つまり、この時点で、各々の様態の絶対的に特異な本質の出現と、それらがすべてその内にあり、かつ、そこから産出されるような神の本質の発現は、区別されなくなるのである。ドゥルーズは、『エチカ』のこの箇所を解説しながら、そのことを次のように言い表している。

「その時、様態の力能は、強度的な部分あるいは神の絶対的な力能の度合いとして理解される。あらゆる度合いは

神の内で一致するが、この一致はどんな混同も含まない。（中略）すなわち、諸様態の力能は神の力能の一部分であるが、それは神の本質が様態の本質によって説明される限りにおいてなのである。」（SP, p. 143）

従って、各々の様態の本質が絶対的に特異なものとして出現するに至って、その本質がそもそも神のものであったかどうかは問題ではなくなる。だが、このことそれ自体は、神の存在と本質についての認識、つまり、神の観念を媒介することによってしか可能とはならない。この限りにおいて、神の観念は、一旦到達し、かつ、経過することが必要な通過点としての意義を認められる。そして、こうした解釈の帰結として、各々の事物は、一度神の観念を通過することで、逆にもはや神という一者に依存することなく、それぞれの特異な本質あるいは力能において、それらの相互の連関の下で把握され直すことになる。

さて、以上のような、第二種から第三種の認識への、神の観念を媒介とした進行との対応関係において、『千のプラトー』での内在平面を成立させる三つの契機をとらえ直してみよう。外延的な諸部分の運動と静止の関係、つまり、経度は、第二種の認識の対象に、また、この関係に対応する力能あるいは本質としての強度的な諸部分、つまり、緯度は、第三種の認識の対象に、それぞれ対応することは前に見た。では、前者と後者を媒介する神の観念の対象は、何に対応するのか。それは、実は内在平面そのものである。

実際、『千のプラトー』の別の文脈では、内在平面は、あらゆる属性から構成される総体としての唯一の実体に一致するものとして言及されている。

「あらゆる属性にとっての唯一の実体の問題は、次のようになる。すなわち、あらゆる器官なき身体の総体は存するか。」（MP, p. 190）

「存立平面、それは、あらゆる器官なき身体の総体であり、内在性の純粋な多様体である。」（MP, p. 195）

この箇所に出てくる「器官なき身体」（corps sans organes）[12]とは、『資本主義と分裂症』において非常に重要な概念

であるが、今はこのことについて論じる余地はない。ただ、この箇所から分かることは、この器官なき身体が属性と同一視されており、あらゆる器官なき身体つまり属性の総体としての実体が、存立平面、すなわち、内在平面と同一視されていることである。また、内在性によって特徴付けられる、あらゆる属性から構成される唯一の実体という概念は、明らかにスピノザにおける神を想定している。

更に、内在平面は、第二種から第三種の認識への進行の途中で現れる神の観念の対象であるような神と同じ性格を持つ。そこでは、神の観念とは、最も一般性の大きい共通概念としても妥当する、あらゆる事物に共通なものの認識のことであり、このような観念の対象である神は、あらゆる事物がその内にあり、かつ、それによって産出されるようなものとして認識された。ところで、『千のプラトー』において、内在平面は、あらゆる個体を部分として構成される総体である自然全体として理解された。つまり、あらゆるものがその内にあり、かつ、そこから産出されるという点では、こうした自然全体としての内在平面とスピノザの神は同じ性格を持つのである。それ以前に、スピノザ自身が神と自然を同一視していたことは、「神即自然」という有名な言い方からも明らかである。

そこから、『千のプラトー』において、内在平面の着想がスピノザとの結び付きで言及された際の論述の順序を、神の観念を媒介とした、第二種から第三種の認識への進行の道筋を踏まえたものとして理解することができる。この論述の順序を振り返ってみると、まず、「あるスピノザ主義者の思い出」という表題の一つ目の節では、第一に、運動と静止の一定の関係の下での外延的な諸要素による個体の構成が語られ、第二に、そうした個体を部分とする自然全体としての内在平面の構成が語られた。次に、同じ表題の二つ目の節では、第三に、外延的な諸部分の運動と静止の関係と、個体の力能としての強度的な諸部分の並存が語られた。これらの三つの段階が、第二種の認識、神の観念、第三種の認識にそれぞれ対応する。すなわち、第一に、個体を構成する外延的な諸部分の運動と静止の関係は、共通概念としての第二種の認識において把握される。第二に、あらゆる個体の総体としての内在平面は、最も一般性の大き

い共通概念として妥当する神の観念、つまり、あらゆる事物がその内にあり、かつ、それによって産出されるようなものの認識において把握される。第三に、各々の個体の力能あるいは本質に一致する強度的な諸部分は、神の観念を経過して初めて到達される、第三種の認識において把握される。

以上のことから分かるように、外延的な諸要素、それらの運動と静止の関係、この関係に対応する強度的な諸部分という、内在平面を成立させる三つの契機が、第二種から第三種の認識への進行を踏まえて着想されているのみならず、内在平面そのものもまた、この進行の途中で現れる神の観念の対象に一致させられる。そのことの帰結として、内在平面という概念の内には、複数のものに共通するものの認識から、あらゆるものの総体としての自然全体の認識へ、そこから、個々のものの力能の認識へという進行が含意されていると言える。つまり、内在平面に一致する、あらゆるものの総体の認識は、神の観念と同じく、一旦到達し、かつ、経過することが必要な通過点であり、一度そこを通過することによって、各々の個体の本質あるいは力能をそれぞれの特異性において許容することが可能になるのである。そして、個体を構成する外延的な諸要素の関係に絶えず生じる変化に応じて、そこから出発して認識される、それらの総体としての内在平面、ひいては、各々の個体の強度的な諸部分も、その都度絶えず変化する。『千のプラトー』で、内在平面が、多なるものを、その外から統一性を付与することなく、多なるものとして肯定することを可能にする次元として着想されていたのは、こうした事態を前提としてだったのである。

5. 千のプラトーとしての『千のプラトー』

前章で検討した、内在平面の内に含意されている事態は、『千のプラトー』という著作の成立様式を理解するための手がかりとなる。何故なら、内在平面の概念は、この著作の成立様式を言い表す、プラトー、また、リゾームの概念と密接な関係にあるからである。

「諸々の表現や行動を、それらのそれら自身における価値に従って内在平面上で評価する代わりに、外的あるいは超越的な諸目標に関係付けるのは、西洋的精神の厄介な性格である。例えば、一冊の本が諸々の章から作られている限りにおいて、それは、その諸々の頂点、その諸々の終着点をもつ。逆に、脳の場合のように、微細な亀裂を通って相互に連携し合う諸々のプラトーから作られた本の場合には、何が起こるのか。我々は、リゾームを形成し拡張するような仕方で、諸々の表層的な地下茎によって、他の諸々の多様体と連結可能なあらゆる多様体を、《プラトー》と呼ぶ。我々はこの本をリゾームとして書いている。我々はこの本を諸々のプラトーによって構成した。」（MP, p. 33）この箇所で述べられているのは、ドゥルーズ＝ガタリにとって望ましい思考様式が、内在平面に結び付けられるということ、この内在平面が、プラトー、また、リゾームと呼ばれるものによって形作られており、『千のプラトー』という著作もまた、そうしたものとして書かれているということである。

では、プラトー、また、リゾームとは何か。この箇所から分かるように、多様体、つまり、多なるものが多であることそれ自体が肯定された、多くの要素の集合体の内で、「ある任意の点を他の任意の点に連結する」（MP, p. 31）ような仕方で、他の多様体と自由に連結可能であるようなものが、プラトーと呼ばれる。従って、プラトーは、常に他のプラトーと連結可能であることにおいて、不可避的に複数的な諸々のプラトーである。実際、そのようなプラトーのみが、多なるものが多であることを全面的に肯定する、真の意味での多様体となり得る。更に、このようなプラトーを要素として構成されるより大きな集合体が、リゾームと呼ばれる。

ちなみに、リゾームのモデルとされているのは、根の生える拠点となる多くの塊茎を持ち、それぞれの塊茎から多くの根が多方向に分岐し、錯綜する、ジャガイモ等の植物である。こうした塊茎のあり方が、ある任意の点を他の任意の点に連結するような仕方で、相互に自由に連結される多様体の集合体に重ね合わせられている訳である（MP, p. 13）。

だが、こうしたプラトーやリゾームは、『千のプラトー』という書物に即して言えば、具体的に何を指すのか。この書物は、年代通りにではなく並べられた年号や日付の付いた多くのまとまりから構成されており、それらを相互に独立に読まれ得るものとして提示している。この書物に関しては、これらのまとまりが、プラトーと呼ばれる。

「この本は、諸々の章によってではなく、《諸々のプラトー》によって構成されている。（中略）これらのプラトーは、最後にしか読まれるべきではない結論を除いては、ある程度は相互に独立に読まれ得る。」（MP, p. 8）

このようにして、独立に読まれ得る多くのまとまりが、ある任意の点を他の任意の点に連結するような仕方で、相互に自由に連結される多様体として提示されている訳である。そして、多くのプラトーからなる集合体であるリゾームとは、この書物そのものを指す。先の引用箇所（MP, p. 33）で、「我々はこの本をリゾームとして書いている。我々はこの本を諸々のプラトーによって構成した。」と言われていたのは、そういう意味だったのである。ここから、『千のプラトー』という表題の意味が理解される。つまり、この表題は、この書物が多くのプラトーから構成されていることを意味しているのである。そして、このようにして、相互に自由に連結される多様体を提示することが、多なるものが多であることそれ自体を肯定するための彼等の戦略なのである。

「各々のプラトーは、どんな場所でも読まれ得るし、他のどんなプラトーとの関係の内にも置かれ得る。多に関しては、それを実際に作り出す方法が必要である。（中略）活字上の、語彙の、あるいは、統辞法の諸々の創造が必要なのは、それらが隠された統一性の表現形式に属することをやめ、考察された多様体の諸次元にそれら自身がなる場合にのみである。」（MP, p. 33）

ただ、このことに関しては、この箇所で結論が最後に読まれるべきであると言われていることは、相互に自由に連結される多様体を提示しようとするドゥルーズ＝ガタリの意図に反し、彼等自身が批判する目標や頂点を再び導入することになるのではないかという反論があるかもしれない。しかし、この書物の結論は、通常のような議論全体の総

括ではなく、そこに出てくる用語の説明である。そのため、この場合の結論は、目標あるいは頂点とは決して同一視されない。むしろ、それは、そこから読解が始められるべき出発点なのである。つまり、そこでは、本来は最初に置かれるはずのものが結論として最後に置かれており、結論が最後に読まれるべきであるということそれ自体が既に、読まれるべき順序における転倒を含んでいる。その限りにおいて、結論が最後に読まれるべきであると言われていることは、自由に連結される多様体の提示という彼等自身の意図と矛盾しない。

それでは、このような多様体としてのプラトーやリゾームは、内在平面、あるいは、存立平面とどのような関係にあるのか。前述のように、内在あるいは存立平面とは、各々が多様体であるようなあらゆる個体の総体であった。それと同じく、内在あるいは存立平面は、あらゆるプラトーからなるあらゆるリゾームの総体なのである。

「存立平面（中略）は、あらゆる多様体の外である。逃走線は、多様体が実際に充たす有限な諸次元の数の実在性を示すと同時に、（中略）あらゆるこれらの多様体を、それらの諸々の次元がどのようなものであれ、存立性あるいは外部性の一つの同じ平面の上に平たくする可能性と必然性を示す。本の理想は、あらゆる事物をそのような外部性の平面上に、唯一の頁の上に、一つの同じ面の上に広げることであろう。すなわち、体験された出来事、歴史的な規定、思惟された概念、個人、社会的な集団や組織を。」（MP, p. 16）

この箇所は、リゾームを多様体と等置した（MP, p. 15）後、それを説明するものである。ここで逃走線と言われているのは、ある多様体がその外にある他の多様体と連結される場合に開かれる回路のことである。従って、ある任意の点を他の任意の点に連結するような仕方で、相互に自由に連結される多様体としてのリゾームは、そこから引かれる逃走線によって、他のあらゆるリゾームと連結される。その限りにおいて、リゾームは、あらゆる多様体つまりリゾームの総体としての存立あるいは内在平面を開示する。

このことは、本の内だけでなく、その外である世界をも巻き込んだ形で語られる。この箇所で、思惟された概念の

みならず、体験された出来事や歴史的な規定、個人、社会的な集団や組織までもが、存立平面上に広げられるものとして言及されていることは、そのことを示している。そして、それは、単にそれらを題材とするということにとどまらない。

「根強い信念に従えばそうであるように、本は世界のイマージュなのではない。本は世界とともにリゾームになる。本と世界の非平行的進化が存する。本は世界の脱領土化（déterritorialisation）を確実なものにするが、世界は本の再領土化（reterritorialisation）を行い、今度はこの本が世界の内で自ら自身において自らを脱領土化する。」（MP, p. 18）

本が単に世界を題材とするそのイマージュにすぎないという考え方は、ドゥルーズ＝ガタリによってここではっきり否定される。そうではなく、本と世界は、相互に作用し合うことで、各々が別々の仕方で変化するものなのである。このことは、世界のイマージュとしての本という考え方の範囲内でさえ妥当する。一方で、本が世界を脱領土化するとは、本を読むことが世界のとらえ方を変えることを意味する。脱領土化とは、非常に簡略化して言えば、領土のように境界線を限定された、事物の既存の形態からの脱出を指す。他方で、世界が本を再領土化するとは、読まれた本が世界の中の一つの事物に還元されることで、世界のとらえ方を変える力を失うことを意味する。再領土化とは、再び簡略化すれば、一旦既存の形態から脱出した事物の、既存の形態への回帰を指す。[13] これらの二つのことは、本についての従来の考え方に基づいて語られるが、そのことが可能となるためには、本と世界が相互に作用し合うことが既に前提とされていなければならない。ここにおいて、世界のイマージュとしての本という考え方は、それ自身の内部から解体される。本が自ら自身において自らを脱領土化するとは、そのような事態において、本が世界の中の一つの事物であることを超えて、世界そのものと一体をなすことに他ならない。リゾームは、それらの相互の自由な連結の実現において、本と世界のこの一体化を実現する。こうして、あらゆるリゾームの連結の内で、自然全体としての内

在平面が開示される。その場合、本を読むことは、世界をその認識によって創造すること、ひいては、両者を包括する自然全体をその認識によって創造することをも巻き込んでいる。また、本だけではなく、他のすべてのリゾームについても同じことが言える。

ここにおいて、各々のリゾームは、内在平面の一部分をなすことで、あらゆるリゾームを産出する内在平面の力能を分有するものとしてとらえ直される。その時、リゾーム、また、それを構成するプラトーは、分割されることによってその性質を変える、強度的な諸部分をその力能として持つものとして現れる。実際、リゾームは、「その諸要素が本性を変えることなしには、ある一定の閾以下にも以上にも分割されず、増大も減少もしないような、相対的に分割不可能なもの」(MP, p. 43) として、「強度的な特徴」(MP, p. 44) を持つと言われる。更に、リゾームを構成するプラトーは、リゾームそれ自体が、外延的な諸部分とそれらの関係に生じる変化に応じて、無限に多くの仕方で変化することから、「頂点へと至る、あるいは、外的な目標へと向かう、あらゆる方向付けを回避することによって展開されるような、諸々の強度の連続的な地帯」(MP, p. 32) として言及される。そして、このように、リゾームあるいはプラトーが強度的な性格を持つことは、あらゆるリゾームの総体としての内在平面の開示を前提として語られているのである。

さて、前に見たように、『千のプラトー』での内在平面の概念の内には、個体を構成する外延的な諸要素の運動と静止の関係から始まり、あらゆる個体の総体としての内在平面を経て、各々の個体の力能としての強度的な諸部分へと至る、スピノザに由来する認識の進行が含意されていた。それ自体が一つのリゾームとして、その固有の内在平面を開示する『千のプラトー』という著作そのものも、この認識の進行に即して理解される。

まず、この著作の形態に関して、外延的な諸部分に相当するのは、著作中に含まれる各々の活字、あるいは、それらの活字の配置によって構成される、プラトーと呼ばれる各々のまとまりである。これらの外延的な諸部分が運動と

静止の一定の関係の下で認識されることは、各々の活字が一定の仕方で結び付けられ、プラトーというまとまりが構成されること、あるいは、各々のプラトーが一定の仕方で結び付けられ、リゾームとしての著作が構成されることを指す。このリゾームは、単に本の内だけではなく、その外の世界に属するあらゆるリゾームとも連結することにおいて、それらの総体としての自然全体の認識を可能にし、内在平面を開示する。更に、強度的な諸部分に相当するのは、こうしたリゾームとしての本によって分有された、自然全体の力能の一部分である。この力能は、活字やプラトーが一定の仕方で結び付けられ、リゾームとしての本が構成されることが、自然全体の認識と創造を巻き込んでいる際に生じる、ある種の情動として感じられる。

ただ、リゾームとしてのこの著作における活字やプラトーは、特定の結び付きを前提することを極力排除するような仕方ではあるが、既にある決まった配置において、つまり、何らかの一定の関係の下で与えられている。また、これらの活字やプラトーは、ドゥルーズ＝ガタリ自身の内では、それらを結び付けて、この著作をリゾームとして構成する際に生じる情動を既に伴うような仕方で提示されている。この著作において、リゾームとプラトーが強度的な性質を持つと言われていることは、そのことを示している。つまり、彼等にとって、この著作を構成する各々のプラトー、あるいは、リゾームとしてのこの著作そのものは、最初の時点から既に、外延的な諸部分の運動と静止の関係の認識と、内在平面の認識を経た後で得られる、各々の個体の強度的な力能の認識において把握されているのである。従って、この著作を形作る、彼等自身によるプラトーの結合と、リゾームとしての本の構成はそれ自体で、彼等固有の仕方での、自然全体の認識と創造、また、自然全体の力能の一部分をなす本の特異な力能の創出を孕んでいる。

しかし、読者にとっては事態は異なる。何故なら、読者は、著者と同じく、この著作における各々の活字やプラトーを、決まった配置において、つまり、一定の関係の下で与えられはするものの、それらを結び付けてリゾームを構成する際に生じる情動を最初の時点から感じている訳ではないからである。そのため、読者は、自分にこうした情動が

生じるような仕方で、自分自身で活字やプラトーを結び付けて、自然全体の認識と創造を巻き込んだ、リゾームとしての本を構成しなければならない。その時初めて、リゾームやプラトーは、読者自身にとってもまた強度的な性格を持つものとして、つまり、本来の意味でのリゾームやプラトーとして現れる。この場合、外延的な諸部分として与えられている活字やプラトーのそもそもの配置は同じでも、そこからリゾームとしての本を構成する仕方、この本を包括する自然全体を認識し創造する仕方、そして、この自然全体の一部分としてのこの本の強度的な力能を感じる仕方は、各人によってその都度全く異なるものとなる。ここから、リゾームのみならず、それを構成する各々のプラトーもまた、絶えず新たな情動を伴うものとして現れることになる。

従って、『千のプラトー』という表題は、二つの意味において理解されなければならない。前に、この表題は、この著作に含まれる外延的な諸部分としての、千の、つまり、多くのプラトーを意味することで、この著作のあり方を言い表しているものとして説明された。だが、実はそれだけではなく、この著作の読者が創出する強度的な諸部分としての、千の、つまり、無数のプラトーを意味することで、この著作の多様な読解の可能性をも言い表しているのである。また、この第二の意味を付与されることによって初めて、この著作は、そこに既に含まれているプラトーの数をはるかに超えて、文字通りの「千の」プラトーとなることが可能となる。つまり、この著作は、我々読者がそこに参与することによって無限に展開され得る書物なのである。その限りにおいて、この書物は、我々自身による新たな実践へと常に開かれている。そして、その実践は、各々のプラトーと、それらを含むリゾームとしてのこの書物だけではなく、自然全体を、そこから逆にこの書物の持つ固有の力能を、各人自身がその都度自由に創出することへと我々を導くものでもある。

最後に、本論での議論を振り返っておこう。『千のプラトー』における内在平面は、外延的な諸部分と、それらの運動と静止の関係と、この関係に対応する強度的な部分からなる（1）。これらの三つのものは、『スピノザ―実践哲学』

においては、様態を形成する三つの契機として言及される（2）。これらの契機の内で、外延的な諸部分の運動と静止の関係は、『エチカ』の第二種の認識の対象に、強度的な諸部分は、第三種の認識の対象に対応するため、三つの契機は、第二種から第三種への認識の進行を前提とする（3）。また、内在平面は、第二種と第三種の認識を媒介する神の観念に対応する（4）。『千のプラトー』という著作は、この本を構成する外延的な諸部分としてのプラトーを、内在平面の開示を経た強度的な諸部分としてとらえ直すことを読者に要求する。そのことは、第二種から第三種の認識への進行を指し示すのみならず、その過程で、この進行を媒介する神あるいは自然全体を認識によって創造することをも巻き込んでいる（5）。

註

（1）『資本主義と分裂症』での枠組みを様々な分野に適用しつつ展開する試みとしては、Brian Massumi. *A user's guide to Capitalisme and Schizophrenia: deviations from Deleuze and Guattari*, MIT press, 1992. がある。

（2）『哲学とは何か』の哲学の三つの要素には、「内在平面」に加えて、「概念」と「概念的人物」（personnage conceptuel）がある。本文中で後に挙げる箇所からも分かるように、内在平面がスピノザとの密接な関係の内にあるのに対して、概念と概念的人物は、ニーチェと不可分に結び付けられる（QP, pp. 11〜12, 62〜63）。従って、ドゥルーズ＝ガタリの哲学観の内には、ニーチェとスピノザの結合が見出される。また、ドゥルーズは、一九八八年のインタビューで、自分の初期の哲学研究をスピノザとニーチェの結合を目指すものであったと語っている（P, p. 185）。そこから、『哲学とは何か』の哲学観を、ドゥルーズの初期の哲学研究の延長線上に位置付けることへの展望が開かれる。ドゥルーズの初期における二人の哲学者の同一性については、拙論「ドゥルーズにおけるスピノザとニーチェの同一性—哲学における実践と批判の結合の試み」、九州大学哲学会『哲学論文集』第三〇輯、一九九四年、五九〜七五頁を参照。また、ドゥルーズにおける両者の同一性をその内部から解体する試みとしては、Pierre Zaoui. 'La《grande identité》Nietzsche-Spinoza: quelle identité?', PG, pp. 64〜84. がある。

（3）このことについては、次の二つの箇所を参照。

「人が内在平面について語り得るのは、内在性がもはや自ら以外のものへの内在性ではない場合にである。」（PG, p. 4）

「何物の内にもない内在性は、それ自身が生である。生とは、内在性の内在性、絶対的な内在性である。」(PG, p. 4)

(4) プラドは、『哲学とは何か』における内在平面を、現象学、フーコーの考古学、後期ウィトゲンシュタインの言語ゲームという三つのものとの関係で理解しようとし、特に実践の重視という点に関して、後期ウィトゲンシュタインとの近接性を強調する。Bento Prado Jr. 'Sur le《plan d'immanence》', *Gilles Deleuze: une vie philosophique*, ed. par Eric Alliez, Synthélabo, 1998, pp. 165〜188. ただ、そこでは、最良の内在平面を作成した哲学者としてのスピノザについては、実践においては複数の哲学の作成する複数の内在平面が出現するという理由で、言及されるだけである。*ibid*, p. 313. 確かに、この著作とこれらの三つのものの間に何らかの関係があることは完全には否定できないとしても、これらはすべて、プラド自身も意識しているように、ドゥルーズの著作に対して外的な観点である。そして、これらの観点からは、ドゥルーズ(あるいはガタリ)の思想の内部から内在平面の概念が着想された経緯も、この概念を援用する彼等の幾つかの著作の間の連関も明らかにならないという難点がある。それに対して、スピノザに注目すれば、内在平面の概念が最初に登場する『千のプラトー』以前のドゥルーズの著作、また、『千のプラトー』以後のドゥルーズ=ガタリあるいはドゥルーズの著作との一貫性において、この概念を理解することへの展望が開かれるという利点がある。内在平面とスピノザの関係は、ゲイトゥンズによっても既に指摘されている。Moira Gatens. 'Through a spinozist lens: ethology, difference, power', *Deleuze: a critical reader*, ed. by Paul Patton, Blackwell, 1996, pp. 162〜187, esp., 164〜167. ただ、ゲイトゥンズは、内在平面の概念そのものを検討するのではなく、その内に見出される着想を用いて、ドゥルーズが初期に発表したミシェル・トゥルニエ論(*Critique*, 1967 に初出。Gilles Deleuze. *Logique du sens*, Minuit, 1969 に修正されて再録。)で扱われる、トゥルニエによるロビンソン・クルーソーの物語『フライデーあるいは太平洋の冥界』を分析している。また、スピノザへの言及はないが、同様の仕方で、内在平面を含む『千のプラトー』での着想を用いて、教会芸術とそこに表れた記号の体制を分析する試みとしては、Jean-Clet Martin, 'Cartography of the year 1000: variations on a Thousand Plateaus', *Gilles Deleuze and the theater of philosophy*, Routledge, 1994, pp. 265〜288. がある。

(5) ドゥルーズには、一九六八年に出版された『スピノザと表現の問題』というもう一つのスピノザ論がある。スピノザ自身の内に決して顕著に認められる訳ではない表現という主題をスピノザから引き出すドゥルーズの手法の特色とその問題点については、Pierre Macherey. 'The encounter with Spinoza', *Deleuze: a critical reader*, ed. by Paul Patton, Blackwell, 1996, pp. 139〜161. 本論が、二つのスピノザ論の内で、『スピノザと表現の問題』ではなく、『スピノザ—実践哲学』との関係で内在平面の概念を理解しようとするのは、本文中でも後述するように、この著作に対しては、『千のプラトー』の執筆直後に、内在平面を含むそこでの概念を援用した加筆が行われているため、これらの著作の間の連続性は明白だからである。だが、実はこのことは、二つのスピノザ論

の間の関係についての問題にも関わる。通常、『スピノザ―実践哲学』は、単に『スピノザと表現の問題』の実践的な側面を取り出して要約するだけのものと見なされる。例えば、*ibid.*, p. 145, 147. また、このことに基づいて、内在平面の概念は、二つのスピノザ論を区別なく用いて論じられるか、あるいは、『スピノザ―実践哲学』に対して理論的な基盤を与えるとされる『スピノザと表現の問題』との関係で論じられる。前者の例としては、Moira Gatens, *ibid.* 後者の例としては、Giorgio Agamben. 'L'immanence absolue', *Gilles Deleuze: une vie philosophique*, ed. par Eric Alliez, Synthélabo, 1998, pp. 165〜188. esp., p. 172. 本論では、これらの二つのスピノザ論の間の関係については全く検討できなかったが、こうした問題があることを指摘するにとどめ、今後の課題としたい。

(6) ゲイトゥンズは、超越平面と内在平面の以上のような対比の背景に、ホッブズの『リヴァイアサン』とスピノザの『国家論』の両者に見られる政治哲学の対比があることを指摘する。Moira Gatens, *ibid.*, pp. 164〜165. アームストロングは、このことを更に分析し、ホッブズの構想する、個人の自然権をすべて委託された絶対的な権力を持つ国家と、スピノザの構想する、個人の自然権の自発的な統合によって成立する市民社会の対比を、超越的な一者が多なるものに統一性を与える超越平面と、多なるものが自ら自身を肯定する内在平面の対比の着想の起源として位置付ける。また、アームストロングは、内在平面に定位するスピノザの実践哲学をも、この観点から理解する。Aurelia Armstrong. 'Some reflection on Deleuze's Spinoza: composition and agency', *Deleuze and philosophy: the difference engineer*, ed. by Keith Ansell Pearson, Routledge, 1997, pp. 44〜57, esp., 46〜48.

(7) 『スピノザ―実践哲学』の再版の章立ては、次の通り。第一章「スピノザの生」、第二章「道徳と倫理の差異について」、第三章「悪についての手紙」(ブレイエンベルフとの往復書簡)、第四章「『エチカ』主要概念索引」、第五章「スピノザの思想的発展」(『知性改善論』の未完成について)、第六章「スピノザと私達」。初版と再版に共通する部分についてだが、初版で「生」、「哲学」という表題が付けられていた二つの部分が、再版での第一章と第二章になり、それらの後に、テクストの抜粋と一緒に小さな活字で組まれていた『エチカ』主要概念索引が、四項目を加えられ、再版での第四章となった。初版と再版の間の違いについては、鈴木雅大訳『スピノザ―実践の哲学』、平凡社、一九九四年、二四五、二四九頁を参照。再版で加筆された三つの章についてだが、第三章は、悪の問題を、第五章は、スピノザによる『知性改善論』の放棄と『エチカ』への着手を、いずれも、共通概念、また、その対象である、複数の個体の間の構成の統一との連関で論じている。その前提となるのが、外延的な諸部分の関係と、それに対応する強度的な諸部分という、本文中で問題にしている枠組みであるが、第六章では、それが、経度と緯度、内在あるいは存立平面という『千のプラトー』と同じ用語を使い、また、それと同じ題材を用いつつ語られている。ただ、これらの主題の基本的な部分はすべて、初版部分で既に提示されている。

（8）近年、『千のプラトー』におけるガタリの影響を重視する傾向が顕著になってきているが、このようにこの著作の重要概念をドゥルーズの『スピノザ―実践哲学』が方向付けていることからすれば、そこでの思想の大枠をドゥルーズが規定しているということは動かし難いように思われる。ただ、このスピノザ論の初版は一九七〇年、ドゥルーズとガタリが出会ったのは一九六九年であるため、このスピノザ論そのものがガタリからの影響を受けている可能性については完全には否定できない。

（9）この認識の進行は、非十全な第一種の認識から十全な第二種の認識へ、そこから、同じく十全であるがより高次の第三種の認識へという進行の一部をなす。『スピノザ―実践哲学』では、こうした進行は、悲しみから喜びへ、受動から能動へ、また、能動の内でも最高の至福の感情へという感情の転換を目的とする手段と見なされる。そして、この認識の進行の結果として、神の存在証明が可能となる。従って、そこでは、存在論、認識論、感情論という通常の優位性の序列が、感情論、認識論、存在論という仕方で転倒される。そのことの内には、一見スピノザ自身に反するようにも思われる無神論という契機が読み取られる。こうした仕方で理解される無神論とスピノザの実践哲学については、拙論「ドゥルーズにおける実践哲学―無神論者としてのスピノザ」、九州大学『哲学年報』第五七輯、一九九八年、一七七～二〇五頁を参照。

（10）ただ、神の観念それ自体は共通概念ではない。このことについては、ドゥルーズ自身も言及しており、両者の区別に関して、『エチカ』第二部定理四七注解を指示している（SP, pp. 130～131）。

（11）こうした事態は、註9で言及した、スピノザの内に見出される無神論の、認識論の次元での一つの現れとして理解することができる。

（12）器官なき身体という着想は、現代フランスの俳優であり劇作家でもあるアントナン・アルトーの、未発表に終わった晩年のラジオ・ドラマ脚本『神の裁きと訣別するために』に由来する。アルトーにとって、器官（organe）とは、有機体（organisme）という全体の一部分であり、この全体の統一性を支える機能を担う。このように、身体に器官を割り当てることで、身体を有機体へと組織化すること、つまり、質料に形相を与えることが、神の裁きと呼ばれる。それに対して、器官なき身体とは、有機体へと組織化不可能な身体、あるいは、形相から解放された質料のことであり、こうした身体を創出することは、文字通り神の裁きと訣別するための実践という意味を持つ。アルトーにおける器官なき身体については、Antonin Artaud. 'Pour en finir avec le jugement de Dieu', (*Œuvres complètes XIII*, Gallimard, 1974, p. 104, 287. を参照。

（13）脱領土化、再領土化は、領土化（territorialisation）とともに、『アンチ・エディプス』において提示され、『千のプラトー』においても使用される概念である。これらの概念について、ここで詳しく論じる余地はないが、大まかに言えば、領土化とは、共同性の成立と同時に、言語の成立を意味する。それはそのまま、言語によって分節化され、その形態を固定化されるような事物の出現

でもある。脱領土化とは、領土化の逆の作用であり、再領土化とは、脱領土化したものを再び領土化する作用である。なお、『アンチ・エディプス』においては、これらの三つの作用の各々によって特徴付けられるものとして、原始土地社会体、専制君主国家、資本主義国家という三つの社会体が区分される。

凡例

Deleuze, Gilles, *Spinoza: Philosophie pratique*, Minuit, 1981 (SP)
Deleuze, Gilles. 'Lettre-preface', en *Variation: la philosophie de Gilles Deleuze*, par Jean-Clet Martin, Payot, 1993 (V)
Deleuze, Gilles. 'L'immanence: une vie...', en *Philosophie. N° 47, "Gilles Deleuze"*, Minuit, 1995 (PG)
Deleuze, Gilles. et Guattari, Félix. *Mille Plateaux: Capitalisme et Schizophrénie tome II*, Minuit, 1980 (MP)
Spinoza. *Œuvres complètes*, Gallimard, 1954 (E)